

人生の最期を豊かに過ごす余暇支援をめざして  
音楽を媒介とした老人病院での余暇生活支援の拡大

○今井悦子 工藤直子 草壁孝治 福田卓民 [青梅慶友病院]

### I. はじめに

A 老人病院は「豊かな最晩年をつくる」ことを役割の一つとしている。ここでは残された時間をその人らしく過ごせるように医療・看護・介護はもちろんのこと、患者の余暇生活の充実には欠かせない。そこでリハビリテーション室（以下リハ室）レクリエーション科に所属するレクリエーションワーカー（以下 RW）は、多職種との連携を取りながら様々な楽しみをつくり、楽しめる環境や活動を企画運営する役割を果たせるように取り組んでいる。

この病院は 1980 年に開設し、翌年にはレクリエーションが導入され、歌を含めた様々なプログラムを開始してきた。1992 年からはプロ奏者を招いて院内コンサート（以下コンサート）を実施し、2006 年には希望者を募ったコーラスの定期開催を開始するなど、音楽活動の種目を増やしていった。従来は時間や場所、内容を定めて行なってきたが、更により多くの人が音楽を気軽に楽しめる環境を整えるべく、2007 年にはフリースペースでの演奏（以下ホール演奏）、2011 年には時間を定めず病棟に出向いて行なうピアノの演奏（以下ピアノ演奏）の導入を試みた。

今回はそれらの参加状況などから、導入の効果や今後の課題などについて考察した。

### II. A 老人病院概要（平成 23 年 8 月 1 日現在）

許可病床数 736 床 長期療養型：長い期間にわたり入院が可能

入院患者平均年齢 87.8 歳

平均在院期間 1,251 日（3 年 5 ヶ月）

### III. 目的

多くの人が音楽を楽しむ環境をつくり、人生最後の余暇支援の向上に繋げる。

### IV. 調査期間・対象・方法

期間：平成 2011 年 8 月 3 日から平成 2011 年 8 月 20 日

対象：調査期間に在院していた患者 669 人

方法：音楽に関するプログラムに参加した患者数を①既存プログラムへの参加、②新規プログラムへの参加、③両方への参加、④参加しないに分け結果について検討した。

ここでいう既存プログラムは病棟での歌の会、コンサート、コーラスを示し、新規プログラムはホール演奏、ピアノ演奏を示すものとする。

## V. 結果

対象 669 人は既存プログラムのみ 156 人、新規プログラムのみ 75 人、既存プログラムと新規プログラムの両方 168 人、不参加者は 270 人であった（図）。音楽に関する各プログラムの参加状況は対象期間内で延べ 659 人、そのうち新規プログラムへの参加は 263 人で、39%を占めた（表 1）。男女を比較すると、新規への参加率は女性に比べ男性が高かった。

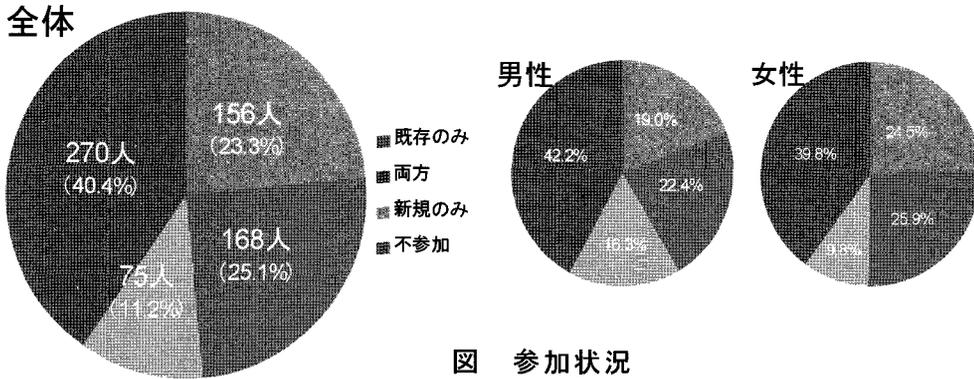


図 参加状況

## VI. 考察

今回新規プログラムに参加した患者は、新規のみの 75 人と両プログラムに参加の 168 人を合わせた 243 人であり、音楽プログラムへの参加率は 48.4%から 59.6%に増えたことになり、今回の導入に効果があったものと思われる。また、新規プログラムを導入してからは映画音楽やリラグゼーション音楽なども取り入れ、音楽ジャンルも幅を広げているために、聴くスタイルや音楽ジャンルから気軽に聴いて楽しめる環境からか、男性の参加も増えたものと考えられる。

現在、音楽に関するプログラムは既存プログラムと新規プログラムを合わせ 5 種類である（表 2）。誰もが参加しやすいという目的を果たすため、新規は場所や開催方法を極力制限しないものとした。それぞれについての概要と課題を挙げる。

	種目	参加者	計	男性	女性
既存プログラム	歌の会	284	396	54	230
	コンサート	82		13	69
	コーラス	30		3	27
新規プログラム	ホール演奏	74	263	18	56
	ピアノ演奏	189		40	149

表 1 種目別参加状況 659 ※重複含む

	種目	開催回数 (回/月)	1回あたりの開催時間 (分)	1回あたりの平均参加者数 (人)	開催場所	開催方法
既存プログラム	歌の会	112 (週2回×14開催)	30	25	病棟ホール	定刻、自由参加
	コンサート	2	60	80	コンサートホール	定刻、予約制
	コーラス	1	45	30	コンサートホール	定刻、自由参加
新規プログラム	ホール演奏	6	20	50	フリースペース	定刻、自由参加
	ピアノ演奏	45	30	15	病棟内の各所	不定期、自由参加

表 2 種目別概要

1) 歌の会：病棟ホールにて各病棟週 2 回、月 112 回の実施がある。そして 1 回の平均参加者は 25 人で定刻にて行われる。この会では RW が各病棟へ出向き、ホールにて歌の伴奏や演奏も含めた進行を行なっている。そして参加者は歌の会の時間になると、各病棟内にあるホールに集まるが患者は病室から目の前にあるホールへの移動距離で済む為、比較的参加しやすい。

ここでの内容は季節の歌は季節感を味わい唱歌では幼少の頃の思い出を回想する。また流行歌では青春時代を回想するきっかけづくりができる。i) また RW は患者とは顔見知りである事から双方の間でコミュニケーションもとりやすい、そして患者同士の交流も深める事も意識している。しかし聴くだけで参加する患者にとっては生演奏を聴いて楽しんでもらうが歌集に沿って進行しているので個人のペースに合わせることが困難である。

2) コンサート：毎月 1 回同じ内容を 2 部制で各 60 分実施している。また事前申し込みで全席指定（当日受付も可）とし、外部演奏家によるコンサートを聴く機会としてコンサートホールにて家族と共に楽しんでもらう。A 老人病院では音響や照明設備の整ったコンサートホールの設備があり、本格的なコンサートホールの雰囲気合わせた環境で音楽が楽しめる。但し事前申し込みや時間と会場席に制約が出てしまう。

3) コーラス：月 1 回 45 分間コンサートホールにて実施し、定例で行われ自由参加である。この会ではハーモニーを奏でる楽しさや斉唱する楽しさを味わえる。だがパート別に音とりをしながら練習するが、集団だけに個人に合わせた対応が困難である。

4) ホール演奏：ホール演奏ではストリート的で身近なコンサートを楽しむ機会である。開催日数が月 2 回、定刻で行なわれている。1 回 3 部制で開催時間は各 20 分である。また病院のフリースペースにて行うため自由に参加でき、外部の演奏家による演奏を楽しむ時間となる。RW は事前交渉を行うが当日の会場設営などをする事なく日常使用しているまま利用し、司会も出演者に任せ参加者の安全を見守る体制をとるという工夫をした。参加者は事前申し込みは不要でその日の体調に合わせて、聴ける良さがある。しかし時間帯によっては聴衆者も多く混み合う事もあり、ゆったり聴けない時もある。

5) ピアノ演奏：病棟内各所にて、月 45 回の開催で 1 回

### 歌の会風景



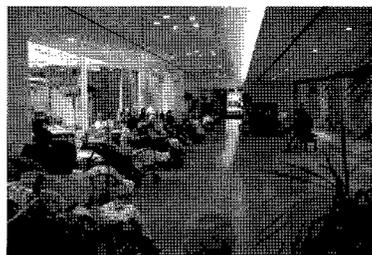
### コンサート風景



### コーラス風景



### ホール演奏風景



## ピアノ演奏風景



30分の演奏をし、1回平均15人の参加があり不定期で自由参加である。RWが各病棟で朝食後、昼食後、夕食前の各時間帯でバックグラウンドミュージックとしてピアノ演奏を楽しむスタイルである。またその場の雰囲気によっては演奏をメインにしたスタイルで実施している。病棟の承諾を取り、ホールにいる方を対象に演奏をすることで、病棟への負担をかけることなく開催した。そして予告も無く思いがけない演奏が始まる事が参加者に伝わると、これから何が始まるのだろうかという期待が高まる。そして病棟スタッフについても流れる演奏に、業務をしながら心地良さを得ている人もいる。また歌の会同様、コミュニケーションも患者もスタッフも共にとりやすい。

## VII. 今後の課題

今回導入した新規プログラムは音楽を聴くことに主体を置き、興味関心があれば参加して楽しむことができるものであり、聴くスタイルの音楽に触れることで豊かな余暇生活を送る一助になればと考える。しかし約4割の人が音楽プログラムに参加していない。その不参加の理由として、他種目の余暇活動種目への参加、体調の具合、難聴、音楽ジャンルの好みなどが関係していることも考えられる。

音楽が余暇生活支援のすべてではないが、今回導入した新規プログラムも既存プログラムもグループで楽しむものである。現在、個人で楽しめるカラオケや楽器の演奏も試みを行っている。また、音楽プログラムを導入した1981年の頃の入院患者の年代は明治から大正時代が大半を占める時代で、現在の入院患者は明治45年生まれ(99歳)から昭和6年生まれ(80歳)が84.5%を占め唱歌や昭和初期の流行歌を中心に歌ってきた。しかしこれからは昭和7年生まれ(79歳)から昭和16年生まれ(70歳)(11%)の年代の人が増えてくる。今後はさらに患者の年代も戦後の人への移行していく。そこで戦後以降の音楽の曲目やジャンルについても対象者に合わせ、変更をしたものを提供することに努め、より多くの患者の豊かな最晩年となるよう研究を進めていきたい。

---

i 草壁孝治・斎藤正彦：高齢者のレクリエーションマニュアル，ワールドプランニング，2002. pp57.